

周辺町村との連携による総学を軸に 地域社会に貢献する意欲と能力を育成

さかわ
佐川高校
(高知・県立)

地域から選ばれる学校となるため、4年前から地域連携による課題探究学習に取り組む佐川高校。

その取り組み内容は高く評価され、地域での存在感が確実に増えています。

生徒の主体性にはまだ課題もありますが、今年度は新たな対策も。着実に進化する同校の取り組みをご紹介します。

取材・文／藤崎雅子

実践のKeyword

🔍 総合的な学習の時間 🔍 地域連携 🔍 インターンシップ 🔍 探究活動 🔍 ルーブリック

生徒数減少の危機感をもとで 総合的な学習の時間を改革

高知市から西へ約20kmの、のどかな地域に位置する高知県立佐川高校。周辺4町村(佐川町・仁淀川町・越知町・日高村)には同校の他に高校はなく、地域の多様な子どもたちが通っている。卒業後の進路は大学進学から就職まで幅広い。100年近い歴史をもつ同校だが、近年、生徒数の減少が続いている。十数年前までは全校生徒数が300人を超えていたが、現在はその3分の1だ。これは単に少子化のためではなく、周辺中学校から同校への進学率が低下していることも影響している。

地域から選ばれない学校に未来はあるか。そんな危機感から、同校は2014年度に1年間かけて教職員研修で議論し、地域と共に生徒を育む「地域の元気の拠点」となることを目指す方針を打ち出した。その代表的な具体策が、総合的な学習の時間の改革だ。

それまで総合的な学習の時間では、進路学習や講演会などを単発で行っていたが、それらはLHRや学校行事に移行。新たに、「地域社会に貢献する意欲を持つ人材の育成」「社会に出て必要な能力の育成」「自分が体験したこと・学んだことを自分の言葉で語れるようにする」という3点を掲げ、地域学習を主眼とする3年間の計画的・継続的なプログラムを設計。15年度の新入生から、学年進行で展開してきた。

この新しい総合的な学習の時間は、同校のキャリア教育の柱としても重要な位置づけとされる。同校生徒は「大人しい」と評されることが多いが、実社会での体験や多様な人との関わり、豊富な発表機会を通じ、社会で役立つ幅広い力の育成を目指している。校長・谷村孝二先生はこう語る。

「プログラムを通じて生徒に期待する姿を端的にいうなら、『郷土を語れる』です。自分自身を知り、地域を知り、それを自分の言葉で語れる。それによって自らの進路を切り拓くことができ、身に付けた力を社会でも活かせるのではないかと考えています」

周辺町村と課題感を共有し 連携体制を整備

新プログラムは「いのち輝けくさくら 咲くプロジェクト」(以下「プロジェクト」と名付けられた。同校の校是と、佐川町の名物である桜を取り入れた、地域連携を象徴する名称だ。

その大まかな内容は、地域学習やインターシップの経験を基に地域課題の発見・解決に取り組む、地域への提言を発表するというもの。すべて地域との連携が前提となる。

そこで、「プロジェクト」立ち上げ時、推進役を担った総務・企画部長・柳井知雄先生と当時1学年主任・堀内理香先生がまず行ったのは、周辺4町村の役場を訪問しての協力要請だ。「地域の元気の拠点」を目指す同校方針と「プロジェクト



School Data

1922年設立／普通科
 生徒数118人(男子43人・女子75人)
 進路状況(2018年3月卒業生)
 大学8人・短大6人・専門学校18人・就職17人
 高知県高岡郡佐川町乙1789-5
 TEL 0889-22-1243
 URL <http://www.kochinet.ed.jp/sakawa-h/mt/>

Outline

江戸時代より文教のまちとして知られる佐川町にあり、県下有数の歴史をもつ。校是は「いのち輝け」。2学年から、就職を意識した教養系と、大学進学に対応した文・理系の2コースを設置し、多様な進路に応じた指導を行っている。総合的な学習の時間では地域との連携・協働による課題探究学習を実施。第11回キャリア教育優良教育委員会、学校及びPTA団体等文部科学大臣表彰受賞。

「の内容を説明。各町村に同校との窓口となる部署・担当を設定してもらい、地域での学習の調整や講師派遣などで全面協力を得る体制を整えた。

「地元の良さを知る機会なく育ち、高校から都市部に流出し戻ってこないという現状に対し、町村も大きな危機感をもっています。その打開につながる本校の考えに、4町村とも賛同し、前向きに協力してくださっています」(柳井先生)

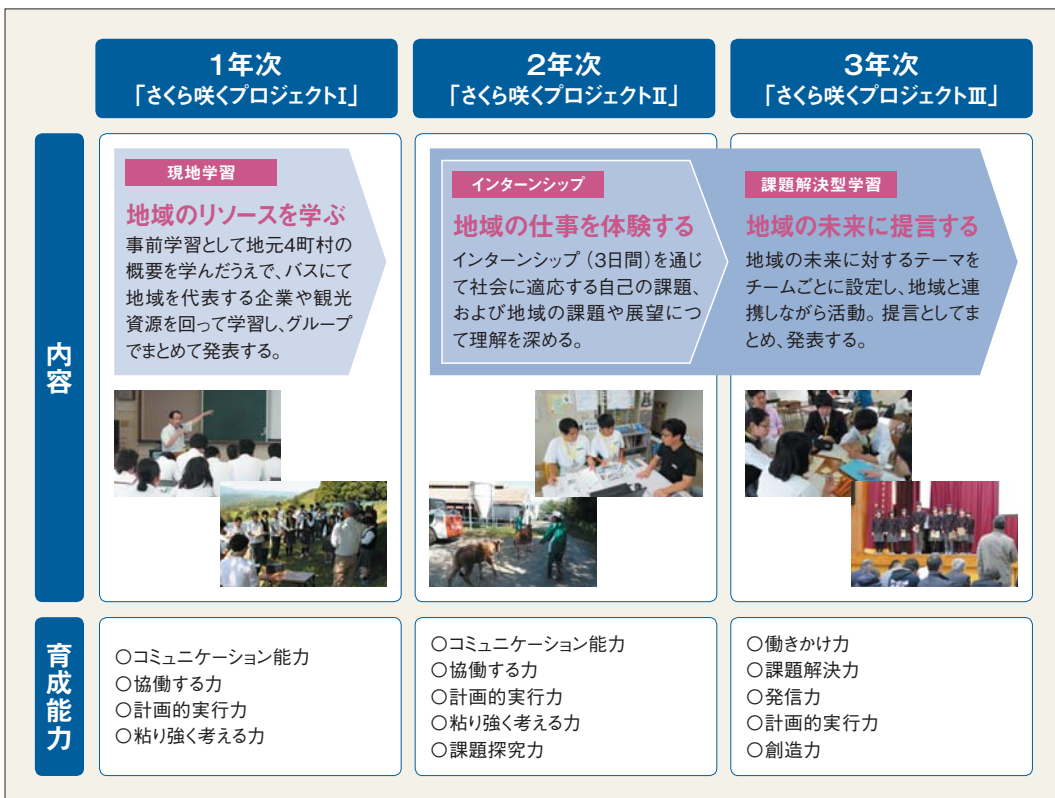
また、昨年度より地域コーディネーターや大学生の学習支援員7人もスタッフとして配置。多様な視点を取り入れながら実践している。

**現地学習で
新たな地域の魅力に気付く**

「プロジェクト」の内容について、順を追って見ていこう。その出発点となるのは「仲間づくり」だ。3年間を通じてグループでの取り組みが中心となるため、まずはゲームを交えた体験学習などを通じて、役割意識をもちながら多様な仲間と力を合わせて活動する方法を実践的に学ぶ。それから、学年ごとの活動テーマに沿った地域学習をスタートさせている。

1学年の活動テーマは「地域のリソースを学ぶ」だ。事前学習として4町村から首長や役場職員を招き、歴史や産業、観光、特産品などについての講義を実施。知識をもったうえで、1町村あたり1日かけて、特産品の農園や工場、販売店、歴史的観光スポット、集落活動センターなど5〜7カ所を回る現地学習に取り組

図1 「いのち輝け～さくら咲くプロジェクト～」の概要



む。そのなかで得た情報や気づきは、グループごとにKJ法などを活用しながらまとめるとともに、言語活動の機会として発表会を実施している。

「本校生徒の約9割が4町村の出身ですが、初めて訪れた場所や、知らなかった

特産品も多いようです。『何も無いと思っていたけれど、こんなにいろんなものがあった』と、地元の新たな魅力に気付く生徒も少なくありません」(堀内先生)

2学年の活動テーマは「地域の仕事を体験する」。自己理解と地域理解の2つ

図2 「地域の未来への提言」テーマ例(2017年度)

- 佐川茶を広める方法
- ぢちちプロジェクト(地乳を使った商品開発)
- 高齢者の笑顔フォトコレクション
- 意識 ～地域への周知と事前準備の啓発活動from震災～
- 移住者の気持ちを伝えよう
- 若者の定住と農業の振興
- 山を守る。

など

「佐川茶を広める方法」に取り組んだグループは佐川茶の淹れ方講習にも参加。「佐川茶のおいしさを知った」との声も。



「ぢちちプロジェクト」が開発に参加した3種類のプリン。町の観光協会などで不定期販売されている。

の狙いをもつて取り組むインターンシップを核に、地域で働くことについて体験的に学ぶ。4町村の企業や工場、病院、福祉施設、農家、役場など28事業所と連携。事前に、働くことに関する講演会やグループ討議を行ったあと、今年度は7月に3日間のインターンシップに取り組んだ。仕事体験の合間に、職場で働く人たちの話を聞く時間も設けている。「身近にある職場でも、その中身はなかなか見えないものです。特に、働く大人たちの話から、事業所が抱える課題を痛感したり、地域に対する思いに刺激を受けたりしているようです」(2学年主任・多田須美子先生)

特産品の拡販や防災など 地域課題に取り組む

1・2学年の活動成果を基盤とし、3学年は課題解決型学習「地域の未来への提言」に取り組む。地域の現状を踏まえ、地元の特産品アピールや、防災意識向上、福祉や移住促進など多様なテーマを設定(図2)。数人のグループで、役場や観光協会などでヒアリングしたり、地域でのフィールドワークを行ったりしながら、解決に向けて取り組む。

例えば、昨年度、佐川茶の拡販に取り組んだグループは、茶葉の生産地の見学や、佐川茶の歴史についてのインタビュなど幅広く活動し、佐川茶紹介パンフレットの制作や、佐川茶を楽しまための佐川町の間伐材を使ったコースター作りなどを実施した。また、佐川町のブランド牛乳を地域活性に活かそうと活動する地乳(ぢちち)プロジェクト推進会議に参加したグループは、同会議の大人たちと打ち合わせを重ね、自分たちのアイデアを取り入れた、地乳を原材料とするプリンの商品化に挑戦した。

この課題解決型学習の最後のまめとして、連携した地域の人たちも招いた発表会を開催。全グループが壇上で取り組みの成果についてプレゼンテーションを行う。

「人前で話すことが苦手な生徒も多いのですが、あえて大きな舞台を設定しています。直前までがんばり、高いハードルを乗り越えることで、生徒は大きな達成

図3 3年次 さくら咲くプロジェクトⅢ 自己評価の基準表

ダウンロード可

評価レベル	← まだできていない				よくできた →
	Lv1	Lv2	Lv3	Lv4	Lv5
働きかけ力 【地域・外部との関わり】	チーム会議などでチームメンバー(先生含む)と意見交換できた	チーム会議などで支援員さん(講師の方含む)と意見交換できた	チーム活動で地域の方と話し合いができた	学校外の活動(フィールドワーク)を1回でも実施できた	得られた助言や校外活動の成果を活かした発表ができた(中間、リハ、本番)
課題解決力 【小ステップを乗り越える経験】	チームのテーマ・課題を把握している	チームの作業(提出物・発表原稿などの作成)に参加できた	チームテーマについて、「地域の強み」または「弱み」が1つでも発見できた	チームテーマについて、「地域の強み」と「弱み」の両方が把握できた	地域の強みを伸ばす、または、弱みを克服する策を提言に活かした
発信力 【プレゼン発表】	発表準備、プレゼンテーションの資料作	カンペを見ながら、発表できた。または、パソコンの操作がで	時々顔を上げて、プレゼンテーション発	チーム内で時々アイコンタクトを取りなが	チーム内での連携し、聴衆の様子をうかがいながら、プレゼ

感を得ているようです」(堀内先生)

失敗してもいいから 生徒が自ら考え行動する

学年進行の展開のため、「地域の未来への提言」は昨年度が初回となったが、発表会では非常に高い評価を得た。しかし、そこまでのプロセスにおいてはまだ課題が大きいという。

「わからないところがあると教員に助けを求め、アドバイスをもらってようやく動く」という生徒の姿がまだ目につきます。

図4 3年生の振り返り ～自分にどのような力が身についてきたか～

- 自分たちが考えた提言が少し違うなと思った時、どうしたらより良い提言になるかをもう一度考え直すことができたと思う。また、自分の意見を相手に伝え、相手の話を聞いたうえで解決策を提案することができた。コミュニケーション力がとても身に付いたと思うし、自ら話し合いを進めていこうと努力できたと思う。
- 私は、創造力が身に付いてきたと思います。この能力は、一人では難しいけど、仲間と考えたらできると思いました。
- 自分たちでアンケートを取ったり現地に行って課題を見つけ、その課題を考える力。
- 課題に対して計画的に取り組み、それをわかりやすく発信する能力は付いたと思う。少しずつではあるけど、人を巻き込んで周りにも理解してもらえるような、巻き込む力も付いてきたと思う。
- 自分で動いてプロジェクトを進めることができたと思った。今までは人についていくことが多かったが、今回の活動では、休みの日や放課後や空いた時間に、一人でも進められるようになった。

もつと生徒が自ら考え動くようにしていきたい」(教頭・野村健一先生)

そこで、今年度はいくつかの改善に取り組んでいる。スケジュール面では、昨年度は生徒自身を考えさせる時間が少なかったという反省から、今年度はテーマ検討開始の時期を1年早め、2学年の初めに設定。その後のインターンシップにおいても地域課題を意識しながら行うよう促すなど、常に自分のテーマを頭の片隅に置き、それを随所で取り出し考えを深めていくことを目指している。



3学年主任
宮崎智憲先生



2学年主任
多田 須美子先生



1学年主任
堀内理香先生



総務・企画部長
柳井知雄先生



教頭
野村健一先生



校長
谷村孝二先生

指導者側の関わり方も見直した。授業を担当する教員や地域コーディネーター、大学生支援員と打ち合わせ、自分たちは「メンバーの一人」であり、「グループのリーダーはあくまで生徒」とのスタンスをとるよう徹底を図った。ただし、単に突き放すのではなく、課題解決の方向性を生徒自身が見つけやすくするよう、「地域がどうなることを目指して活動するのか」というゴールを意識させるなどのサポートに「層力」を入れている。

教員の主導を控えることで、昨年度ほど提言のレベルが高まらない可能性はある。しかし、「プロジェクト」の目的は、素晴らしい提言をすることではなく、生徒の成長にあるとの考えだ。

「やらされ感で地域課題を解決しても、生徒にとつてはあまり意味がありません。逆に、失敗したり未完成のまま終わったとしても、それが生徒自身が考えて行動したことなら、経験として生徒のなかに残り、今後生きてきます。無駄なことは何ひとつない。思い切つてやってみよう。生徒にはそう呼びかけています」(3学年主任・宮崎智憲先生)

ルーブリックを導入し 伸びた点に焦点を当てる

では、そんな生徒の成長を測る評価については、どう行っているだろうか。「プロジェクト」設計時には、経済産業省「社会人基礎力」を参考に、学年ごとに身に付けたい能力を設定。これらを指標として、学期ごとに自己評価と教員評価を行った。

そこに今年度の3学年ではルーブリックを導入・開示し、この取り組みによって目指す姿を生徒自身に具体的にわかりやすくした(図3)。また、教員による評価票では、ルーブリックのレベルを示すだけでなく、伸びた部分に焦点を当てたコメントを記入し、生徒の前向きな気持ちを引き出すよう工夫している。

3年間の「プロジェクト」についての生徒の振り返りには、自分自身の成長を実感するコメントが目立つ(図4)。

「チームが思うようにまとまらなかったり、苦手な発表に取り組まなければならなかったり、それぞれに大変だった様子です。一方で、それを乗り越えたことで自分の成長を実感し、この経験が社会で活かせるとの感想が多くあがっています」(堀内先生)

進路面への良い影響も出ている。「プロジェクト」導入前、就職・進学の面接で自分自身を語れないことが課題だったが、今は自信をもって自分の体験を語る姿が多く見られるようになった。また、地域学習をもっと深めたいと大学進学したり、大学卒業後は地域に戻って学んだことを活かしたいという将来設計をもったり、地域に対する思いの強い生徒が育っているという。

「この取り組みは種まきのようなものです。すぐには顕著な効果は見えないかもしれませんが、この『プロジェクト』で育んだ意欲や力が、10年後、20年後にどんな花を咲かせるかを楽しみにしています」

地域からの注目・期待に 取り組みの重要性を実感

(柳井先生)

「地域の元気の拠点」を目指して取り組み始めて3年あまりが経ち、同校に対する地域の視線は明らかに変わったという。「プロジェクト」の活動が広く知られ、地域の側から同校に協働プロジェクトを提案されるケースも出ている。このように地域から注目されることは、教員の意欲のもとにもなっているようだ。

「教員も生徒と一緒に地域に出ていくなかで、地域からの期待を肌で感じ、地域に貢献できる人材を育成するのだという責任感が高まってきたように感じます」

(柳井先生)

谷村校長は、今後、同校の学びがさらに進化するなかで、例えば「地域医療を支えたい」という生徒がいたら、実際に医学部へ進学させることができる学校を目指していきたいと考えているという。

「そのためには、地域貢献の意欲や力を育むと同時に、生徒が希望する将来をつかむための学力が身に付く学校となる必要があります。授業力の向上を図るとともに、小・中学校とカリキュラム面で連携するなど、一層地域に根差して改善を図っていきたいと考えています」(谷村校長)

Interview

目指す職業に就いたとき、 「プロジェクト」の経験が活かそう

●今「プロジェクト」で、佐川町に道の駅を作ることを目指して活動しています。僕は佐川町の出身なのですが、高校で学ぶまでニラやお茶がこんなに有名だと知りませんでした。道の駅では、そんな地域の良さをアピールしたいと考えています。単に特産品を販売するだけでなく、例えばニラ狩り体験のような体験イベントも企画して、周辺にある道の駅を越える内容にしたいですね。



(写真左から)
3学年 藤田 駿くん・片岡瑞穂さん

こんなふうに、グループでコミュニケーションしながらアイデアを出し合い、計画的に物事を進める授業は、やりがいがあって、僕は好きです。将来の目標である英語教師になれたときも、この経験はきっと活かせるのではないかと思います。(藤田くん)

●「プロジェクト」では、佐川町のPR動画の制作に取り組んでいます。目指しているのは、10代~30代の若い人たちが佐川町に出掛けたくくなるような内容です。高知駅から電車で佐川駅にたどり着くまで、車窓の風景やご当地グルメなどの写真をつなげて、コマ送り動画のように仕立てたらどうだろう、とグループで話しているところです。

私には小さいころから、保育士か幼稚園の先生になるという夢があります。2年生で保育園のインターンシップを行ったとき、保育士は子どものために自分で考えて行動することが大事だと感じました。「プロジェクト」を通じて、その姿に少しずつ近づけているかな、と思いながら取り組んでいます。(片岡さん)